

丘に広がる野田

④

社会部 リレー連載

昔の「野田往還」である平和町大通りを歩くと、沿道に飲食店や美容院、クリーニングなどの店が並ぶ。一方、シャッターが下りたままの店も目に付き、商店街としてはややさみしい。

どうすれば店に人が来て町がにぎわいを取り戻すのか。策を練る人の輪の中に、近くにある金大附属高の「平和町プロジェクト」メンバーの生徒がいた。

通り沿いでクリーニング店を営む平和町連合町会協議会長の村田保夫さん(67)と金大附属高2年の梶川紗希さん(16)が楽しそうに話していた。話もつぼら、8月6日に平和町公園で開く納涼フェスティバル(北國新聞社後援)の企画である。

「平和町の催事で一番人がくれない」「そうなんですかね。頑張らないと」。高校生たちはフェスティバルで、借り物競走を改良したゲームや、うちわへの着色を楽しめるブース運営を通じて盛り上げる計画だ。

先輩から後輩へ
高校によると、平和町と関わる高校生のプロジェクトは2019年に始まった。当時の総合的な学習がきっかけとなり、年度をまたいで先輩から後輩へ活動が引き継がれた。友人の誘いで参加した梶

高校生の力でワクワク



金大附属高生が参加したクリスマスイベント
—昨年12月、平和町会館

老舗商店街で連携事業

川さんは高岡市在住。通学だけでも大変だが、「平和町の人は温かくて楽しい。実現性のある企画や、人に伝わるチラシを考えるのは学校では勉強できないので」とにっこり。プロジェクトを真面目に楽しんでいく様子が伝わってくる。

平和町大通り商店街振興組合は1969(昭和44)年に誕生した。加盟店数が最も多かったのは74年の72店。金沢のニュータウンのはしりである平和町の住民の暮らしを支えてきた。

現在は48店に減った。組合専務理事でもある村田さんは「今もお客さんの中心

は地元だが、みんな年をとって1人暮らしも多い。山環(金沢外環状道路山側幹線)ができて車の通行量は増えたけど、行き先は大型店だと分析する。

それでも平和町には40、50代と比較的若い店主が多い。そこにプロジェクトの話が降って湧いた。「反転攻勢は今しかない」とばかりに、共同で客を呼ぶアイデアを練り出した。

「近所付き合いです。ある時は、商店街に来た園児や児童に菓子を渡し、店に来るきっかけをつくるハロウィーンを行った。子ども食堂と連携したクリスマスイベントや、ネコの目線で店を紹介する動画「猫カフェ」も手掛けた。生徒は催事だけでなく、年2回の歩



納涼フェスティバルに向けて話し合う梶川さん(左)と村田さん(中央)
—平和町2丁目

道清掃にも参加する。商店街を舞台とした「近所付き合いの輪は広がっている。昨年11月には、組合

と金大附属小、陸上自衛隊金沢駐屯地が協力し、大通りに花を植えた。初めての合同行事だった。レストランを営む組合理事長の林雄一さん(54)も「つながりを大きくして、街を盛り上げたい」と話す。

「町のことを考えるのは大変だけど、面白い。新商品開発に向けて今は思案中です」と梶川さんは言う。もったいぶられて、逆に気になってきた。高校生や周辺の人々がつながった老舗商店街には、人をワクワクさせる力がまだまだある。(社会部・北脇大貴)